

かまくら 女性史の会 Newsletter

第 119 号

2024 年 9 月 21 日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10

NPOセンター鎌倉 気付

メールボックス 26

E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

『女性と図書館』青木玲子 赤瀬美穂著 — 《本書から女性史を考える》

著者のお一人、青木玲子さんは図書館とともだち・鎌倉の会員であり、或日の会合の折、本書を寄贈された。3日後、Newsletter118号巻頭執筆者の飯澤文夫さんから私宛お送り頂いた、勉強せよと。

3章からなる**第1章**は「図書館史から見える女性と図書館」。1899（M32）年の「図書館令」以降、1945（S20）年敗戦後徐々に廃止されるまでの婦人閲覧室について、新聞を始め各地の図書館資料から紹介している。「男女七歳にして席をおなじゅうせず」や「良妻賢母に読書はいらない」明治近代の閲覧室。利用者は25歳までの若い女性、本を持参し短時間に読書する姿も。10席を木製の衝立で仕切る閲覧室など。今も残る部屋の一つに、今年国登録有形文化財に指定された旧鎌倉図書館も載る。

この時代図書は男のもの、荻野吟子は本を読んだために離縁された。一方、神戸市立図書館は、開館当初の11（M44）年から女性と子どもを迎え入れた館長もいた。与謝野晶子は男女差別に、金子しげりは長期休館に、異議を唱えている。また、当時は女性自身も男子の中へ入ることに抵抗感を持つ環境にあり、婦人閲覧室はいかに利用者を図書館に呼び寄せるかの発想であったともいう（「戦前期の図書館における婦人室について」宮崎真紀子2001.6）。こうした中、21（T10）年文部省は図書館員教習所を開設。25（T14）年図書館員講習所と改称し、男女共学になる。共学の理由は、女性を児童部担当のため特別に採用した、と。この年、講習所の卒業生22名のうち女性は6名。良質な女性労働力に対し、女性への賃金格差では現在に引き継がれていないかと、筆者は問うている。

関東大震災以降、多くの女性が関連資料を探しに図書館へ足を運ぶ中、図書館員は女性に向く職業といわれるようになる。NL117号の西弘子さんの母千恵子さんの司書資格取得を改めて読む。

第2章、3章「男女共同参画センター・ライブラリー」、「過去・現在・未来をつなぐジェンダー情報」50（S25）年図書館法が制定され、その利用に男女差別はなくなり閲覧中心から貸し中心になる。60～70年代図書館は母親と子どもたちであふれ、PTAの母親文庫、地域文庫が次々誕生した。

筆者たちは、執筆する中で女性関連の資料の少なさに気づき、ジェンダーの視点が必要と求めていく。79（S54）年東京都婦人情報センターが開設され、同じ年、埼玉県嵐山町に国立婦人教育会館（NVEC）に情報図書室が開館する。女性情報資料の多様性とは何かを学び、加えて海外の女性図書館・女性グループのネットワークが98（H10）年アムステルダムで行われ参加する。99（H11）年、全国の自治体に男女共同参画課が置かれ、男女共同参センターが各自治体に出来、資料収集の拠点となる。

2008年、NVECは女性アーカイブセンターを開設し、史・資料の収集に努め、現在に至る。

2024年9月12日 かまくら女性史の会 曾原 糸子

『女性と図書館』ジェンダー視点から見る過去・現在・未来 日外アソシエーツ 2024.2.25発行

《例会記録》

2024年7月27日(土) 10:00~12:30

鎌倉婦人子供会館 同窓会室 出席者4名他2名

1) 三浦富美子氏 2度目のインタビュー

・7月26日(金) 13:30~16:00

この聞き取りは「戦争体験」としてNLに掲載

・F☆L113 12月1日(日)に、三浦氏の長崎被爆体験やその後の人生を話して頂く講演会を企画



★シリーズ：私たちの「戦争体験」 No. 43

「広島被爆体験を鎌倉で語り継いで」②

話者 影山邦子 聞き書き 平田恵美

○爆心地から3キロの住まいで

母は川口町の家で下駄箱を掃除していて頭を中へ突っ込んでいたので、せん光を受けなかったようです。飛んできたものにも当たらなかったのが怪我をしてなかったのです。火がおさまってから、母は市内の病院へ行きましたが、燃えて何もありませんでした。

祖父母の家の周りも焼野原で、母が訪ねていくと二人は放心した様子で立っていました。その時、二人は家の外でしたが、物陰にいましたので光りは浴びていませんでした。家の中にいた曾祖母は、呼んでも声がしなかったのが、家の下敷きになって即死したと思い、逃げる時、「行くからね」と手を合わせ、川の岸に降りて、火事がおさまるのをじっと待ちました。川岸にはけがをした人がたくさんいて、川には死体がいっぱい流れていました。

川口町の住まいは町の中心部から離れた、海に近いところにありましたので、直撃は受けませんが、屋根や壁は壊れていました。

その後祖父母は、川口町の家に来て、壊れていない部屋で「家があって良かったね」と言って畳の上で並んで寝ていましたが、髪の毛が抜け落ちたり下血して、8月の終わりごろ亡くなりました。祖父は内科医でしたが、隣に寝ているおばあさん

2) F☆L113「かまぐらの保育IV」原稿 10/1-19

3) 『通史』読み合わせ P. 281~284

2024年9月3日(火) 13:00~16:45

鎌倉中央図書館 多目的室 出席者5名

1) NL119号9月21日発行について(担当:石崎)

2) 次号NL120号の巻頭文を、「史の会 三須宏子氏」に依頼し、お引き受け頂いた

3) 「かまぐらの保育IV」進捗報告

4) 『通史』読み合わせ P. 285~286



の脈を診るだけしかできず、「おばあさんは先に逝ったよ」と言って次の日に自分も亡くなりました。二人はやけどもしないで、いいことが重なって静かに亡くなりました。

★大田洋子の『屍の街』を読む

8月は戦争を猛省し戦死者悼む特別の月間だ。広島文学資料保全の会が8月15日に「第45回サントリー地域文化賞受賞記念国際シンポジウム原爆文学の今を考える」を開催した。江刺昭子氏がパネラーのおひとりだったこともあり、オンライン参加をした。

広島には原民喜、峠三吉、栗原貞子、大田洋子ら原爆文学の系譜がある。原爆文学は目に見えたものを文字化して草稿し、推敲するがその最初の草稿が記録資料として重要で、後世に伝えなければならない。原爆文学ほどフィクションとノンフィクションの境がないものはないと言う。保全の会は原爆文学の「世界記憶遺産」登録を目指し、一方資料館建設運動を粘り強く続けている。

参加を機に『屍の街』を読んだ今更であるが。被爆した作家が3日間原爆投下の市内を彷徨し、漸く郊外の田舎に辿り着くのだが、声に成らない呻きと呆けた絶望が支配する死の街と静かな怒りがリアリティをもって迫る。丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」に通ずる圧倒的な恐怖である。(横松)

10月の例会&作業 場所:中央図書館多目的室

6日(火)13時~ 22日(火)13時~

(19日(土)を22日(火)に変更しました)